



大津町在住 大学生
古庄日菜子さん

震災を経験して

東日本大震災の影響で地震についての意識は持っていました。しかしそれは当事者としての意識ではありませんでした。熊本地震で強い揺れを体験し、災害に対し何も備えをしていなかった自分を反省しました。東日本大震災の教訓は多くの犠牲をもとに作られたものはずです。そうした人たちに申し訳ない気持ちになりました。

ボランティアへ

地震直後、混乱した状況の中で私にも何かできないかと考え、SNSで情報を集めていました。ボランティアの呼びかけがたくさんありました。町運動公園球技場で人手が足りないという情報を見つけ、すぐに行動に移しました。友

達と一緒に、食事を運んだり、ゴミを拾ったり、おじいさんたちのマッサージをしたり、話し相手になったり、エコノミー症候群予防のチラシを車のワイパーに挟み込む作業などをしていました。

自分ができることを

4月中旬に益城町にもボランティアに行きました。益城町はいたるところで家屋が倒壊しており、それを目の当たりにしてショックを受けました。その時、学生の私も、できることをしなければと思いました。

地震を経験し、気付いたことはたくさんあります。家族や友人の大切さや、住むところがあることの大切さなどです。当たり前が壊れるのは一瞬なんだということも知りました。だからこそ私たちは一瞬一瞬を大切に、当たり前を守っていかなければならぬのだと思います。町が以前の活気を取り戻すために、今後も自分に来ることを頑張ります。



学生に出来ること

地元密着の道の駅大津へ



道の駅大津「駅長」
うえの けんいち
上野賢一さん

炊き出し

地震直後、道の駅大津は広い駐車場があるため、多くの人が昼夜問わず避難していました。私は営業再開を優先して考えていたのですが、レストランオーナーからの「炊き出しをしたい」という言葉で我に返りました。「今は炊き出しだ」と思い直し19日に準備し、20日には豚汁や井ものなど千食分の炊き出しをしました。SNSで発信するとたくさんの人たちが集まり、「久しぶりに温かいものを食べた」と喜んで頂きました。

臨時配給所として

取引先から「何かできることはありますか」との申し出があり、避難している人に要望を聞いて、ブルーシートや水、離乳食、おむつな

どをお願いしました。駐車場を臨時の物資配給所として使うことにし、「3時間後に配布します」とSNSで情報発信したところ、多くの人が集まりました。運営は試行錯誤でしたが、物資の配給を継続しながら、道の駅は20日から一部営業を再開させることができました。

自分の役割

自分で言うのも恐縮ですが、地震後の3カ月は自分のサラリーマン人生の中で一番仕事をしたと思います。本当に必要なものが何かを考えるきっかけになりました。また、たくさんの人からの励ましを受けたことや、買い物をしてもらったことが大変嬉しく、感謝しました。そうしたこともあり、これまで以上にお客様との会話が増え、お客様をより大事にするようになりました。自分の仕事の意味、本質を考えることに繋がったように思います。

当たり前が壊れ学校に行けなくなってしまった古庄さんと佐々木さん。学生にできることは何かと自らに問いかけた。そして「**私たちが行動しなければ**」とボランティアを行った。大きなことではなくても**学生に出来ること**を。

ボランティアの経験

地震後は一週間以上車中泊をしていました。車中泊は大変でしたが、その時に友人と「何かしないといけないよね」という話になりました。

5月3日から28日まで参加できる日にはボランティアをしました。初めてのことで分らないことや覚えることも多かったのですが、家に帰ってからその日の復習をして、翌日のボランティアに備えていました。ところが次の日にはさらに仕事の種類が増えていて、あぜんとしたこともありました。精神的に辛くな



大津町在住 大学生
ささき かのり
佐々木香澄さん

る時もありましたが、ボランティアをやって良かったと思っています。

当たり前の大切さ

地震によって大学は長期間休校となりました。大学に行けなくなり、初めて大学は勉強するだけではなく、友人と会える場所なんだと気付きました。地震直後は友人と会えず、とても寂しかったことを覚えていますが、友人と普段どおりに会えないことがこれほど辛いと思ったことはありませんでした。「大学に通う」という私たちにとっては当たり前のことが、有り難く感謝すべきことだと感じ、同時に私たち学生にとって学校という場所を守るべき大事なところなのだと感じました。

危機感を忘れずに

大学が再開した今、ようやく日常が戻った気がしています。再開後の講義の中で「時間が経ったら危機感が薄れていく」という話を聞きました。震災から半年以上経った今、まさにその状態ではないかと思っています。地震はもう絶対ないとは言えないので、これからも危機感を忘れないようにしていきたいと思っています。日常に感謝しつつ、私にできること一つでも見つけて行っていきたくと思っています。

支援活動とSNS

地震後はしばらく車中泊をしながら、昼は道の駅、夕方は交流センターでの炊き出しの手伝いをしていました。私は道の駅大津では、SNSを使った情報発信をする担当だったので、地震直後も、道の駅での支援物資配給についての情報発信を行っていました。SNSへの反応は凄かったです。町の人口をはるかに



道の駅大津
みづはし かずお
三池和臣さん

地域に密着した存在へ

地震直後、避難のために道の駅大津に来る人は多く、その時は多くの方々と接しましたが、地震の影響で来られるお客さんは減りました。この経験から考え方が180度近く変わったように感じます。

仕事では、もっと地元密着でいくべきではないかと考えるようになりました。これまでも春のつつじ祭りなどのイベント企画をしていたのですが、密着の意味をさらに考えていかないといけないなと思いました。阿蘇への通過点として道の駅大津に来ていた人たちだけでなく、地域の皆さんが足を運ぶような存在にしていきたい。さらに子どもたちが遊べる、例えばから芋ほり体験などができる場所になれると良いなと思います。町のために役に立つ存在になるように努力します。

「本当に必要なものは何か」と考えるようになり、「**考え方が180度変わった**」という上野さんと三池さん。地震後、道の駅に来られるお客様が減ってしまったことを教訓に、**地元**に密着し、お客様を**大切に**することの重要性を痛感した。